

小詩運動の周辺：周作人と謝冰心

小川，利康
早稲田大学

<https://hdl.handle.net/2324/1913920>

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp.23-31, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：

小詩運動の周辺

——周作人と謝冰心

早稲田大学 小川 利康

1. 回顧：『春水』手稿本の縁

一九三四年七月、周作人は妻羽太信子と共に久方ぶりに日本を訪れた。

滞在期間中、周作人は中国を代表する文学者として多方面から歓迎を受けた。松枝茂夫が中国文学研究会主催になる来日歓迎の宴席に連なり、初めて周作人に会ったのもこの時だったという*1。歓迎会だけでなく、インタビューや寄稿依頼も受け、管見の範囲でも日本の新聞三紙（『朝日新聞』、『読売新聞』、『時事新報』）及び雑誌四誌に談話や会見記を残している*2。そのうちの一つで、雑誌『改造』記者によるインタビューでは「『小さい詩』という運動」、すなわち一九二一年に自ら提唱した小詩運動について次のように語っている。

俳句は支那の詩に対して、少しは影響する処あったが、詩の改革運動としては成功しなかった。短かい詩——という様なことを言っても、詩にはどうしても韻がなくては感じが来ない。或いは無くてもいいのかも知れぬが、今の処やはりそうは行かない。

「小さい詩」という運動もあったが、結局生長しなかった。然し、この運動は失敗したが、影響は未だ残っていると思う。即ち、事象を表わす場合に、俳句的な把握の仕方をするのである。（以下、引用は必要に応じて現代仮名遣いに改めた）*3

*1 拙編「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇(1)」(『文化論集』第三〇号、早稲田商学同攻会二〇〇七年) 19360309M書簡。

*2 『朝日新聞』は七月二十二日付で来日の報道があり、八月二十一日付で島崎藤村らの招宴を写真入りで報道している。『読売新聞』は七月二十六日付で周作人の談話記事「現代支那文学を語る」を浴衣姿の周作人の写真付きで掲載し、久しぶりの日本についての感想記事も載せている。また、八月二日付で佐藤春夫ら中国文学研究会による招宴開催の記事を掲載している。この読売の談話記事は『支那』(一九三四年九月号、東亜同文会)に転載されている。このほかにも談話記事として、「日本文学を語る」(『改造』一九三四年九月号、改造社)、井上紅梅「周作人氏に聞く」(『文芸』第二巻第九号、改造社一九三四年九月)がある。会見記としては藤森成吉が周作人歓迎の宴を開いたことを写真とともに『文学評論』(一九三四年一〇月号)で紹介し、佐佐木信綱が自宅竹柏園に招いた際の記念写真と周作人の揮毫した色紙が『心の花』(第三八巻第十号、一九三四年十月)に掲載されている。

*3 周作人「日本文学を語る」(『改造』一九三四年九月) 二五一頁。

文章は記者の聞き書きなので、本人の発言通りではない可能性もあるが、「小さい詩」とは一九二一年から始まった小詩運動をさすものと考えられる。一九二一年末頃から始まった小詩運動については朱自清による歴史的な概括（『中国新文学大系・詩集』導言「一九三五年八月」）が最も手際の良くまとめられている。

周啓明〔作人〕氏は民国十〔一九二一〕年に日本の短歌と俳句を翻訳し、このようなスタイルは一目見た景観やとっさの情緒を写し取るのに適した虚飾なき簡潔な詩だと説いた。作り手は随処に山ほど現れた。しかし、短い詩型だけが取り柄で、刹那の感覚も分からず、字句も彫琢せず、安直さだけを狙ったため、含蓄ある余韻を失っていた。…民国十二〔一九二三〕年に宗白華『流雲小詩』が刊行された後、小詩も命数が尽き、新詩も道半ばで衰退した。^{*4}（〔 〕内は著者による注記）

朱自清は一九二二年に創刊された『詩』の主編を俞平伯、劉延陵とともにつとめ、小詩運動の始まりから終わりまでを見届けた当事者であるだけに、その特徴と欠陥を的確に指摘している。朱自清によれば、失敗の原因は詩型の模倣が容易であるために安直な作品が増えた点にあると考えているが、周作人は前段の談話で中国詩にはやはり韻律が必要で、小詩の失敗も韻律がなかったためだと述べており、両者の間には見解の相違がある。周作人は、ほかの訪日中の談話記事「現代支那文学を語る」でも韻律の問題について次のように述べていた。

詩も、支那では漢詩が立派な典型をなしていて、白話で新形式のものを作る事が困難になっている。日本の新体詩は成功した。日本の歌には韻があるが、白話で韻を踏むと徒らに単調になり勝ちだ。如何なる形式を新しき詩は採らねばならぬか、ここにも現代支那文学の迷いがある。いい散文詩はあっても、どうもそれを詩と云う事ができず、詩人として成功している現代作家は寡^{すくな}い。^{*5}

この談話では中国と日本の詩歌と比較しながら、自らの「迷い」を語っている。韻律を持つ定型詩である漢詩と白話詩とを比べ、新たな形式を生み出すことが困難であると述べる部分で周作人の念頭にあったのは、やはり小詩運動であろう。日本は、明治以降、漢詩の影響を脱して西洋詩を文語による新体詩に翻訳し、口語自由詩へと発展した。また、短

^{*4} 朱自清「導言」（『中国新文学大系第八集・詩集』）四頁。

^{*5} 周作人「現代支那文学を語る」（『読売新聞』朝刊一九三四年七月二十六日）十頁。

歌、俳句は明治以降も伝統的な韻律形式を維持しながら口語表現を取り入れ、新たな活力を得ていた。この訪日の際も、明治の短歌革新運動を主導した佐佐木信綱に招かれて竹柏会を訪問しており、定型詩としての短歌がどのように日本で発展してきたか依然関心を持っていた。「白話で韻を踏む」とは、聞一多らによる口語格律詩を指すのであろうが、口語の押韻は「単調になり勝ち」だと評価せず、日本の近代詩の発展と引き比べながら中国での口語自由詩は十分な成功を取めていないことに不満を示している。

そのような小詩に対する思いが去来していたせいも、井上紅梅によるインタビューには次のように発言している。

問 先生のお弟子の中で文壇に頭角を露わした者が、非常に多いと云う話ですが…

答 いや、そんなことはありません。只大学に来て講義を聴いた人は随分ありますが、本統に親しくしているのは二三人です。現在清華大学の教授をしてゐる兪平伯。此人は兪曲園の曾孫で支那文学研究家として一家をなし時々評論を書いています。作家では馮文炳と冰心女士です。^{*6}

馮文炳（廢名）、兪平伯は、周門四大弟子と呼ばれるなかでも突出した存在であり、周作人に近い作家として広く認知されている。だが、謝冰心が燕京大学在学中に周作人の学生だったことは余り知られていないのではないだろうか。

昨年、中里見敬によって、九州大学図書館濱文庫所蔵の詩集『春水』手稿本が謝冰心の自筆原稿であることが明らかにされた。この画期的な発見の裏づけとなったのは昨年初めて公開された一九三九年の「周作人日記」であった。この日記の記述によって、周作人が一九二三年当時主編を務めていた新潮社文芸叢書から『春水』を刊行する際に著者本人から自筆原稿を預かったもので、一九三九年に古紙整理の際に見出され、長男周豊一氏友人の濱一衛氏に贈呈されたという来歴が明らかになった^{*7}。『春水』手稿本が辿った数奇な運命は、周作人と謝冰心との不思議な縁を改めて感じさせてくれる。これまで筆者は一九二二年に周作人が提起した小詩運動というマイナーなテーマで何篇か論文を書いたことがあるが、周作人と謝冰心の関わりについては論じたことがなかった。この機会を借りて、周作人の提唱した理念とどのように関連づけられるか検討してみたい^{*8}。

^{*6} 井上紅梅「周作人氏に聞く」（『文芸』第二巻第九号、改造社一九三四年九月）。

^{*7} 中里見敬「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」（『九州大学附属図書館研究開発室年報 2014/2015』）、中里見敬「冰心手稿藏身日本九州大学——「春水」手稿、周作人、濱一衛及其他」（『中国现代文学研究丛刊』二〇一七年第六期）。

^{*8} 小詩運動に関する拙稿としては以下のようなものがある。「周作人と清華園の詩人達——「小詩」ブームの波紋」（『文化論集』第二〇号、商学部同攻会二〇〇二年三月）、「周作

2. 接点：燕京大学の発足

周作人と燕京大学との係わりは、燕京大学文学会に招かれて行った講演「聖書与中国文学」（一九二〇年十一月）から始まった。この時、作人を講演に招いたのは燕京大学の学生だった瞿世英（菊農、一九〇〇～一九七六）である*9。瞿世英は五・四運動で学生聯合会（北京）代表の一人として活躍し、鄭振鐸、葉聖陶、茅盾らと親交を結ぶなかで、周作人の紹介する「新しき村」運動に共鳴し、『人道』を発刊したほか、学内でも『燕大季刊』主任を務めた。『燕大季刊』の編集は瞿世英など燕京大学文学会のメンバーによって行われ、組織としては一体であった。『冰心年譜』によれば、謝冰心も一九二〇年五月から『燕大季刊』に加わり、秋からは副主任を務めていたという。従って、周作人の講演会開催当時、彼女も主催者側の責任者だったということになる*10。

燕京大学は当時華北協和女子大学、通州協和大学、匯文大学のミッションスクール三校が合併して新たに発足したばかりで、中国杭州生まれのアメリカ人ジョン・スチュワートが校長に就任していた。瞿世英は匯文大学から、謝冰心は華北協和女子大学から燕京大学に編入し、お互い知り合ったばかりだったと考えられるが、加入早々の『燕大季刊』第一卷三期に散文詩、小説、雑感計三篇を書くなど健筆を振るい、瞿世英とともに「北京社会的調査」のダイジェストを編んでおり、新人以上の活躍ぶりだったことが窺われる。周作人の講演企画自体は瞿世英によるとしても、副主任として当日の講筵に連なっていたはずだ。瞿世英に伴われ、謝冰心も周作人に一言二言挨拶くらいはしたのではないか。こう見てくると、謝冰心が周作人と初めて面識を得たのは従来の定説より早いと考えられ、一九二〇年十一月の講演の時だったのではないか。その後一九二一年一月に文学研究会が発足すると、謝冰心も会員として名を連ねており、すでに瞿世英らと同様に周作人の知遇を得ていたことを示すものだろう。

周作人は講演会后、燕京大学から国文系の教授となるよう招請を受けている。その仲介を務めたのは胡適であった。一九二一年二月四日、「外国文学の分かる中国人学者に国文学科の教授を担当して欲しい」との理由で燕京大学はまず胡適を招請したが、胡適は周作人を推薦した*11。その理由として、胡適は「啓明〔周作人〕は北京大学で能力を生かしてお

人与小詩運動」（『現代中文学刊』2016年第四期、二〇一六年八月）、「文白の間——小詩運動を手がかりに」（『中国古籍文化研究（稲畑教授退休記念論集）』東方書店二〇一八年三月刊行予定）。

*9 周作人「許地山旧話」（香港『新晚報』一九六三年九月二九日）、『周作人散文全集』（広西師範大学出版社）第十四卷一一五頁。

*10 卓如『冰心年譜』（海峡文芸出版社一九九九年）、一九二〇年五月二一日の項。

*11 「112. 胡適致周作人」、『胡適来往書信選』（中華書局一九八三年）一二四頁。

らず、惜しまれたので、彼が行けば本領発揮できると考えたのだ」と日記で述べている*12。

燕京大学招聘の提案は、その後周作人が半年以上肋膜炎で病臥したため、一度沙汰止みになってしまった。その話が復活したのは一九二二年三月のことで、七月から北京大学教授と兼職する形で国文系副教授として燕京大学に迎えられることになった。

周作人日記によれば、その着任に先立ち、六月三日に謝冰心ら国文系の学生と顔合わせをしている。謝冰心は編入当時は理化予科に在学していたが、一九二一年七月に文学本科に転入し、国文系の学生となっていた*13。従って、この顔合わせの際に謝冰心がいたことは確実だろう。

その月の十六日には、周作人は燕京大学文学会の招きで講演をすることになっていた。この時、瞿世英は燕京大学をすでに卒業し、文学会の会長は謝冰心となっていた。従って、講演の依頼者は謝冰心であったはずだ*14。時間的な流れからすれば、顔合わせの際に講演を依頼したと考えるのが自然だろう。周作人日記によれば、講演原稿は六月七日に起稿され、十三日には完成していた。ところが、当日になって「夜、本来は燕京大学文学会のために講演すると約束していたが、体調悪く、断る」ことになってしまった。周作人は毎月のように体調を崩しては大学を休んだり、面談をキャンセルしているが、この講演も当日になって中止された。そのため講演原稿は「論小詩」と題して後日『晨报副鐫』（六月二十一日、二十二日）に掲載された。文章の冒頭には、燕京大学文学会での講演を体調不良で中止し、その原稿を発表すると述べ、文学会の諸君に謝意を示したいと記している*15。

以上から、前回一九二〇年の講演に出席した謝冰心が今度は上級生として自ら周作人に講演を依頼したものの、講演自体は中止の憂き目に遭ったことが分かる。ここまで延々細かく考証してきたが、講演原稿として発表された「論小詩」は周作人が唯一謝冰心の作品を具体的に論評した評論である。その評論がじつは本人の依頼によって準備された講演原稿であり、周作人も本人の前で話し聞かせるつもり執筆したことが明らかになった。書かれるテキストがあらゆる人に開かれているのはもちろんだが、聞き手が確定していれば、その存在が原稿に反映されることは十分想像されることであろう。その意味で、この「論小詩」は謝冰心のために書かれた講演原稿といっても良いのである。

*12 『胡適的日記』上冊（中華書局一九八五年）二七五頁、一九二二年三月四日の項。

*13 『冰心年譜』一九二一年七月の項、三三頁。

*14 『中国現代文学家辞典』現代第二冊（四川人民出版社一九八二年）一〇〇〇頁、萩野脩二『謝冰心の研究』（朋友書店二〇〇九年）三〇四頁注記(21)。

*15 『周作人日記』（大象出版社一九九六年）による。

3. 批評：「論小詩」での理論的指導

「論小詩」は拙稿でこれまでも論じてきたとおり、小詩運動の理念を体系立てて論じた初めての評論である。これまでも小詩という表現は繰り返し用いていたが、ここで初めて石川啄木「歌のいろいろ」（原著一九一〇年）に依拠して、小詩の特性を説明する。

私たちの日常生活にはさほど切迫しておらずとも真実の感情に満ちている。……もしも私たちに「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心がある」、それを表現したいなら、数行の小詩が最良の道具である。^{*16}

原文でも括弧でくくられている箇所は石川啄木から引用である。ここでは詳論は省くが、現実の生活の断片を赤裸々に描き出すには短歌が最も適していると啄木は主張した。その主張を取り込んだのが周作人の小詩運動であった。

このような日本の短詩における方法論は当然ながら謝冰心の小詩とは明らかに趣を異にしている。そこで現在好評を博している「春水」を自分の小詩論のなかでどのように評価するかという問題に取り組んだのが、この「論小詩」だったといえる。当時『晨报副鐫』では三月二十一日から六月末まで、ほぼ連日「春水」を掲載しており、「論小詩」はそこに割り込むような形で掲載されたのは当初予想していなかったとしても、「春水」の作者の前で講演する予定だったのだから、どうしても説明する必要に迫られていた。

そのため周作人は「論小詩」のなかでは、タゴールの作品にも言及し、日本とインドの小詩は傾向が異なるため、中国にも異なる傾向の小詩が存在するという見方を示した。この説明をより整合的にするために、日本の短歌俳句とインドの詩歌の作品を比較し、「(日本の俳句と短歌は)中国の新詩にもいささか影響があったが、インドとは異なっており、その態度は現世的である」として、タゴールの「迷い鳥たち (Stray Birds)」と与謝野晶子の短歌を比較している。

流水唱道，“我唱我的歌，那时我得我得自由”^{*17}

^{*16} 同上。『周作人散文全集』では初出（『晨报副鐫』一九二二年六月二一日）の文中で「刹那刹那」とあるのを重複として削除するが、啄木の原典での「刹那々々」の直訳であり誤植ではない。

^{*17} 周作人「論小詩」（『晨报副鐫』一九二二年六月二十一、二十二日）、『周作人散文全集』第二卷五五六頁、中国語訳は王靖君の訳と付記があるが、出典不明。英語原文は Rabindra nāth Tagore, *Stray Birds*, Macmillan & Co.LTD, London, 1919, P.10(No.36)、邦訳は内山眞理子『迷い鳥たち』（未知谷二〇〇八年）十五頁による。

THE waterfall sings, “I find my song, when I find my freedom”.

滝はうたう、「私が歌を見つけるのは、自由をみつけたとき」と。(タゴール『迷い鳥たち』)

拿了咒诅的歌稿，按住了黑色的胡蝶。

のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き胡蝶をおさへぬるかな（与謝野晶子「みだれ髪」）*18

この二つの作品を掲げ、周作人は「ここに双方の違いをおおよそ見てとることができるだろう。従って、彼らの影響を受けた中国の小詩も当然二つの派に分かれる」と述べる。具体的に両者の「違い」をどこに見ていたかは読者自身が前後の文脈から汲み取る必要があるが、それは前段で述べる「現世的」という言葉を手がかりにすれば、理解しやすいだろう。タゴールの詩では、水の流れる音を歌に喩え、流れ落ちる滝の水に自由を見出しているが、これは実景というより想像上の景観に近く、リアリティには欠ける。これに対して、与謝野晶子の短歌には日々の生活にうみ疲れ、その思いを書き連ねた「のろひ歌」の「反古」には質量感があり、読み手に実景としてのリアリティを感じさせる。「黒き胡蝶」には短歌だけでは抑えきれぬ少女の暗い情感を隠喩するものだろうが、反古紙で潰される蝶の感触も伝わってくる。総じてタゴールの軽やかさと透明感と引き比べ、両者は余りにも対照的である。その情感の重さと含蓄の深さに周作人は小詩の目指すべき方向を見出し、次のように評価している。

この数種類の違いから、短歌は概ね抒情に特長があり、俳句は風景に感情を仮託し、小唄は恋情を主とするが質朴なもので、いずれも簡潔で含蓄ある点で共通している。その点からみて日本の歌はまことに理想的な小詩といえる。*19

とはいえ、タゴールの影響下にある謝冰心を自らの理念と異なるがゆえに十把一絡げに否定することはせず、次のように評価している。

*18 周作人「論小詩」、『周作人散文全集』第二卷五五六頁、日本語原文は与謝野晶子「みだれ髪」（一九〇〇年）、『鉄幹晶子全集』（勉誠出版二〇〇二年）第二卷九二頁（一一九）による。なお、与謝野晶子の短歌については逸見久美『新版評伝与謝野晶子明治篇』（八木書店二〇〇七年）一三三頁を参照した。

*19 周作人「論小詩」、『周作人散文全集』第二卷五五六頁。

冰心女士の「繁星」は自らタゴールの影響を受けたと説明するように、同書中の六六、七四の二首では次のようにうたう。

深林裡的黄昏/ 是第一次麼? / 又好似是幾時經歷過

(奥深い森の黄昏/ 見たのは初めてかしら/ でも何度も見たような)

嬰兒/ 是偉大的詩人: / 在不完全的言語中, / 吐出最完全的詩句。

(こども/ それは偉大なる詩人/ 片言の言葉で/ 完璧な詩句を口にする)

この二首は代表作といえるだろうが、この後はあれこれ模倣した作も多く、ここで列挙するまでもあるまい。^{*20}

謝冰心の小詩に共通する特徴として、「奥深い森の黄昏」にしても、「嬰兒/ 是偉大的詩人」(こども/ それは偉大なる詩人)にしても、高度に抽象化された心象風景であって、実景ではない。周作人の理念としての小詩はあくまでも日本の俳句短歌のように実景に仮託した感情の描写を要件としていたが、謝冰心の作品にはリアリティがないので、タゴールとの共通性を指摘するにとどめたと考えられる。総じて見れば評価は高くないが、これは謝冰心の後に紹介される俞平伯「南宋六陵」(『憶游雜詩』)、汪静之「湖畔」についても同様で、それぞれの特徴を指摘しつつ問題点も指摘しており、教師が学生の作品を批評する態度に近い。批評のまとめに代えて、「どんな流派からでも影響を受けて構わないが、模倣は駄目だと私は平生から主張してきた。だから、小詩の流行には賛成で、その成長を興味深く見守っているのだ」と述べる口ぶりはまさしく教師そのものであろう。周作人としては理論的な指導を行いながら、小詩を今後さらに発展させてゆこうという気概に満ちていたのである。この思いが一九三四年まで失われなかったからこそ、自らの門下生の一人として数えたのであろう。

4. 尾声：友誼の証

米国留学から帰国した後、謝冰心は順調に燕京大学国文系で教員となり、その後一九三三年に清華大学国文系に転じた経歴をみても、周作人との関係は歴然としている。燕京大学教授の職は、周作人が一九二二年に胡適の紹介で引き受けてから一九三九年に銃殺未遂事件に遭って辞任を余儀なくされるまで長らく務めたポストであり、その大学に彼女が帰国後すぐに就職したのも周作人の意向が働いているだろう。謝冰心が留学した後も周作人が長く『燕大週刊』に度々寄稿し、学生の文芸活動に協力したことからも燕京大学への気

^{*20} 周作人「論小詩」、『周作人散文全集』第二卷五五六、五五七頁。

持ちが窺われる*21。その後異動した清華学校（大学）への異動も同様で、一九二五年に大学部が増設された際にできた国文系には朱自清、兪平伯が先に着任していた。周作人との関係もさることながら、二人とも一九二二年に雑誌『詩』を創刊した当事者なのだから、当時の清華大学には小詩運動の主要詩人が顔を揃えていたことになる*22。日本の侵略から逃れて、謝冰心が北京を離れるまで、周作人の苦雨齋という文芸サロンの常客であり続けたことを思えば、一九三四年の時点で周作人が自らの門下生として謝冰心の名を挙げたのは、小詩運動で世に出た作家としてだけでなく、その後も長く好朋友としての交流を保っていたからに相違ない。その後、周作人との交友について沈黙を守らざるを得ない時代が長く続いたが、謝冰心は晩年の文章で何度も周作人の名前を挙げている。これも学生時代以来の友誼を長く心に銘じていた証であろう。

二〇一七年十二月三十日初稿

*21 王翠艷「周作人与『燕大周刊』」、(『魯迅研究月刊』二〇一五年第十期)。

*22 『兪平伯全集』第十卷、附録「兪平伯年譜」による。なお、朱自清は兪平伯の推薦で清華大学国文系の創設時（一九二五年）に教授となった。兪平伯は創設時には講師だったが、一九三二年に教授となった。その翌年に謝冰心が教授として迎えられた。